



メッセージ ～特攻基地・知覧～

大分県代表

おおいたけんたけ た し りつたけ た
大分県竹田市立竹田中学校3年

ひろせ がく
廣瀬 岳

セピア色の写真の中の彼らは、楽しそうに腕相撲をしていました。「頑張れ!」「いいぞ。」「負けるな。」の声に囲まれて、負けまいと必死に力を込めている2人の若者の表情。そして笑顔。僕はその写真の前から足を動かすことができませんでした。

僕は去年の夏休み、鹿児島県の知覧にある、特攻基地記念館に行きました。そこで僕が目にしたのは、飛行機に乗って敵艦に突っ込み散っていった、特別特攻隊員たちの遺品でした。

多くの写真の中の若者達は、皆笑っていました。友と楽しく遊んだあの輝いた時間も、語り合ったあの温かな時間も、翌日には消えてしまうのに。それを見て僕は涙が出そうになりました。

隊員達の写真を見ながら、「なぜ隊員に志願したんだろう。」「どんな気持ちで志願したんだろう。」という疑問がわいてきました。大切な人を守るため?国を守るため?自分の命と引き替えに何かを守るなんて、僕には想像もできません。きっと僕だけでなく、誰だって同じだと思います。それなのになぜ、彼らは志願したのでしょうか。

僕は、はっとしました。それが戦争なのだ、彼らはきっとその道を選ぶしかなかったのだ、と。

改めて戦争の悲惨さを感じながら、僕は彼らの遺書を見ました。そのほとんどが、お母さんお父さんなど家族に向けて書いたものです。隊員といっても年は僕より2つか3つ上。学年でいえば高校生です。僕より少し年上の若者が、大切な人と永遠の別れをしなければならないという現実がそこにはありました。

若者が書いた字とは思えないような、立派な筆文字で書かれた遺書の中に、『何も言う事なし』と書いた遺書がありました。この人は、書きたかったことが山ほどあったけれど、あえて書かなかったのだと聞きました。茶色がかったその紙の余白に、若者は何を書きたかったのでしょうか。

父への感謝、兄弟へ言い残しておきたいこと、これまでの多くの思い出。

「死にたくない、僕はまだ生きたい。」

「怖いよ、母さん!」

自ら死に向かう若者の声が僕の心に響きました。

明日死ぬと知りながら、やりたいこともいっぱいあったと思います。それをあきらめて国のためにと散っていった隊員達。言いたいことも言えず、死に向かうしかなかった彼ら。僕には一生かかっても出せない勇気を、ふりしぼる道しか残されていなかった若者達。

僕があの夏、心から感じたのは、生きることのありがたさでした。知覧の空に飛び立っていった彼らに出会い、僕は今まであたりまえだと思っていた、自分の存在を見つめ直すことができたのです。

僕はそれまで、家族と一緒に過ごすことも、大好きなサッカーができることも、学校で勉強することも、すべてがあたりまえだと思っていました。その上、何かちょっとでも嫌なことがあったり、思い通りにいかないことがあったりすると、すぐに不機嫌になっていました。何もかも面倒だと感じ、なげやりになることも、けんかした友達に「死んでしまえ」など、命を軽んじる言葉を言ったこともあります。「命が尽きるなんて、遠い遠い先のこと。」とっていたからです。そんな僕に、彼らは『命の輝き』を教えてくださいました。

彼らが僕に伝えてくれたメッセージ。それは「今を精一杯に生きること。」彼らに出会ったことで、「自分のできることは何でも挑戦してみよう。努力してみよう。世の中をよく見つめ、しっかり考え、おかしいことはおかしいと、自分の言葉でものが言える人間になろう」そんな気持ちになれたのです。

セピア色の写真の中から聞こえてきたメッセージ。僕は彼らのメッセージを忘れません。